滋賀文化財だより
NO. 148
1990.3.20
●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

173. 平成元年度滋賀県下における発掘調査の紹介 その2

12. 出町遺跡の水田発見

近江八幡市出町　出町遺跡

出町遺跡は近江八幡市出町、音羽町地先に所在しており、昭和58年より土地区画整理事業に伴う調査等、10数次の発掘調査を実施してきた。その結果、海抜約88mを前後する微高地に、掘立柱建物で構成された、弥生時代中期と古墳時代前期の集落が存在していたことを確認した。

今回、水田跡を検出したところは、集落の南側で地形的にも低い所である。水田の区画や古墳時代前期以前の耕作土については、残念ながら確認することはできなかったが、当時の様々な水利施設を確認できた。

幅約8mの自然流路に大木を切り到し、枝や雑木を縦横に組み水を堰き止め、主要用水路に水を引き込んでいる。幅約80cm前後を測る主要用水路に引き込まれた水は、各々の用水路に振り分けられる。その分起点には、先を鋭く加工してある矢板や杭を利用し堰を設けている。堰は、直径4cm前後丸杭のみ使用しているもの、幅15～20cm、厚さ3cm前後の矢板のみ使用しているもの、矢板と丸杭を使用し、二重構造になっているものがあった。また水田を区画する幅約20cmの小水路も一部検出しており、これら小水路は用水路から水を取り入れ易くするため、取り入れ口のみ用水路の底より若干深く掘り込んでいる。遺構の性格上遺物の出土量は少なかったが、用水路の埋土より、ほぼ形になる古墳時代前期の広口壺が出土している。

水田の灌漑施設

今回発見した水田の耕作面は、現在当該地で水田耕作を行っている面とほぼ同レベルと考えられ、当時の畔や耕作土は全て削平されていると思われる。しかしこれから周辺の調査が進行するうえで十分に発見される可能性はあり、矢板や丸杭を使用する堰の相異が用途や性格の違いであるかは今後の課題とするとこである。また時期についても集落の相互関係から十分に検討する必要がある。

（近江八幡市教育委員会　角上　寿行）

13. 未盗掘の古墳時代前期竪穴式石室発見

八日市市　雪野山古墳

八日市市・近江八幡市及び竜王町にまたがる雪野山山頂（標高308.8m）において、古墳時代前期の竪穴式石室を検出した。石室内部は未盗掘の状態で、副葬品が多く出土した。

これは雪野山を取り巻く2市2町（蒲生町を含む）と県が進めている蒲生野歴史街道整備事業の一環として八日市市が実施する、雪野山史跡の森整備工事に先立つ発掘調査により明らかとなったものである。

竪穴式石室全景

今回の調査は竪穴式石室内のみで、墳丘形態、規模あるいは他の埋葬施設の有無等詳細は来年度以降の調査の結果を待たねばならないが、副葬品や木棺の型式から4世紀中葉の古墳時代前期の古墳であることが判明した。

竪穴式石室の基軸はほぼ南北方位

を示し、規模は内法で長さ6.08m、幅は北端1.40m、南端1.30m、高さは木棺検出面までで1.44m、南端に扁平な天井石が一枚残されていた。材質は側壁、天井石ともに湖東流紋岩である。床面に粘土床を設置し、その上に木棺を安置している。

木棺の形状は両木口部分に環状の縄掛突起をもつ舟形木棺で、底面の屈曲率が割竹形木棺より緩い。木棺の長さは5.3m。幅は北端で0.88m、南端0.78m。突起の幅は北端0.47m、南端0.28m。突出長は0.20mである。

副葬品は棺内から、舶載鏡3面（三角縁波文帯龍虎鏡、三角縁天王日月唐草文帯四神四獣鏡、三角縁新出銘四神四獣鏡）、仿製鏡2面（内行花文鏡、鼉龍鏡）、碧玉製石製品（鍬形石1、管玉1、紡錘車2、琴柱形石製品1）、銅鏃を入れた靫、鉄器（刀3、剣1、鎌2、鉇4、鉄鏃3）及び壺形土器等が出土し、棺外から小札革綴冑1、銅鏃50以上、鉄鏃3、鉄刀2、鉄剣2、鉄槍1、靫及び漆塗り製品等が出土している。

（八日市市教育委員会　石原　道洋）

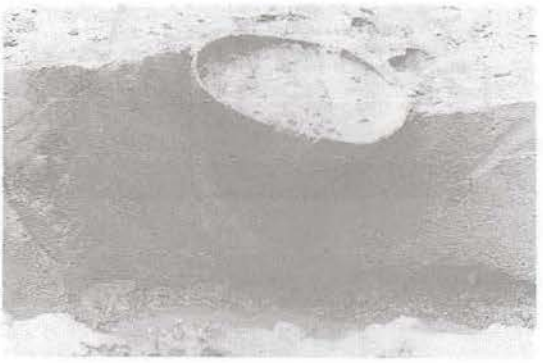
竪穴式石室内部（北から）

14．縄文後期集落の調査

能登川町大字今　今安楽寺遺跡

今安楽寺遺跡は愛知川左岸の自然堤防縁辺部に位置し、東側に続く善教寺遺跡とともに縄文後期の遺跡として知られている。しかし既往の調査では遺物包含層が確認されているだけで、明確な遺構は未確認であった。今回の調査では多数の縄文後期土器のほか、住居跡、土器埋設遺構、土器集積遺構などが発見されたため、ここにその概要を紹介する。

住居跡は2棟検出されている。一棟は黄褐色粘質土を切る茶褐色土ピット群で、外郭を復元すると直径約5mのほぼ円形を呈するものであることがわかる。住居内施設としては埋設土器が住居のほぼ中央部に位置している。もう一棟は上記住居の南東に位置し、一辺約4mの浅い竪穴構造を呈している。このほぼ中央で貯蔵穴が確認されている。



土器埋没遺構

土器埋設遺構は9基検出されている。これらの内訳は完形2、縦半分1、胴部のみ1、下半部のみ5である。底部の遺存する8個のうち6個は底部中央に打ち抜き円形の穿孔を有する。また9基のうち住居に伴うもの（埋甕）は1基のみで、その他はいわゆる住居外埋甕である。

土器集積遺構は、直径約8m以上の不整円形を呈す暗青灰色ないし淡黒灰色粘質土で、深さ約30cmを測る。性格は明確でないが底部は平坦であり、埋設土器が2基（SX10、SX11）発見されていることなどから、竪穴住居の可能性がある。

さて、今安楽寺遺跡で得られた資料からは以下のような問題が浮上している。まず、ここで発見された住居跡の構造は該期で一般的な竪穴構造ではなく、いわゆる平地式のものと考えられる。これは壁面に打たれた杭が上屋を支える柱も兼ねるもので、当遺跡のような沖積地では今後このタイプの住居跡が発見されると思われる。

また、埋設土器は従来関東、中部山岳地方で加曽利E式期以後展開する埋甕（住居内・外）が西進したものだといえる。近年近畿圏および周辺部でも中期末～後期初頭例が増加しており、今後西日本での埋甕研究が期待される。

さらに当遺跡からは残存状況の良好な土器が多量に出土している。これらは主として中津式～四ッ池式併行のものであるが、器種のバリエーションも豊富で、該期の土器研究に一石を投ずるものとなるだろう。

（能登川町教育委員会　植田　文雄）

15．現存していた3基目の古墳

甲良町池寺　四ッ塚古墳群

この調査は県営ほ場整備事業に伴う発掘調査である。

犬上郡甲良町池寺地先に位置する四ツ塚古墳群は、従来9基の古墳があったとされている。そのうち2基は概ね当時のままで現存しており、その他にほぼ位置だけが確認できているものが2基ある。試掘調査の結

3号墳全景

果から1基は確認し本調査を行なった。

まず十字にトレンチをあけ、天井石に使われていたと思われる石が出土し、その後、周囲の部分も徐々に広げていった。その結果、石室の側壁及び奥壁が地中に残存しており、周濠も確認し円墳であることがわかった。全長25m程で掘り幅は3.3～3.9m規模である。底の部分より須恵器の蓋等数点が出土しており、7世紀頃と考えられる。残る1基は今回の調査対象外のため調査は行なっておらず、今後の調査に期待したい。　　（甲良町教育委員会　宮川　哲郎）

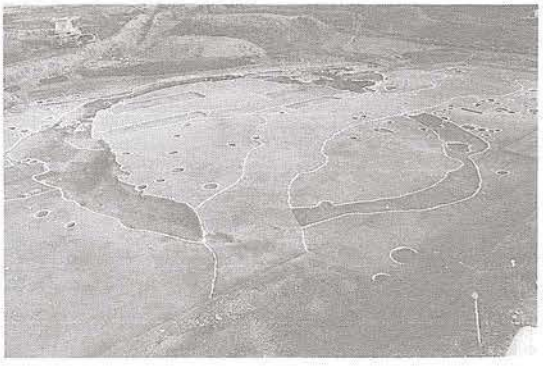
16．縄文晩期～中世の複合遺跡

多賀町大岡　大岡遺跡

大岡遺跡は多賀町大字大岡に所在し、芹川上流の段丘上に立地する。

今回の調査は平成元年度多賀町大岡地区県営ほ場整備事業に伴う事前調査で約9,000㎡を対象に調査を実施した。

調査の結果、縄文晩期から中世までの遺構を検出した。現況は水田である。遺構面までの深さは田面から30～40cm程度で遺構は全対的に後世の削平をうけており遺存状態は良くない。縄文晩期から古墳時代の遺物を包含する溝状遺構、古墳時代のピット群・竪穴住居跡・古墳(円墳)4基、奈良から平安時代のピット群・溝状遺構、中世のピット群・土壙墓等を検出した。当遺跡内において縄文晩期から弥生時代についてはどのような様相を呈する地域であったかは明確にはできなかったが、古墳時代後期から平安時代にかけては集落的な様相を呈していたと推定することができる。4基の円墳はいづれも周濠の一部しか確認できなかったが出土した遺物から6世紀中ごろから7世紀初めごろのものと考えられる。中世においても集落を形成していたと考えられる。



1号墳検出状況

調査地南の丘陵上に十数基からなる大岡古墳群が存在しており、今回の調査で検出した平野部の古墳群との関係、墓域と集落のあり方など検討すべき課題である。また今回の調査は芹川上流域の地方豪族を想定する貴重な資料であり、犬上川流域との比較を踏まえ、犬上郡を構成した勢力として当地域を捉えることができた。

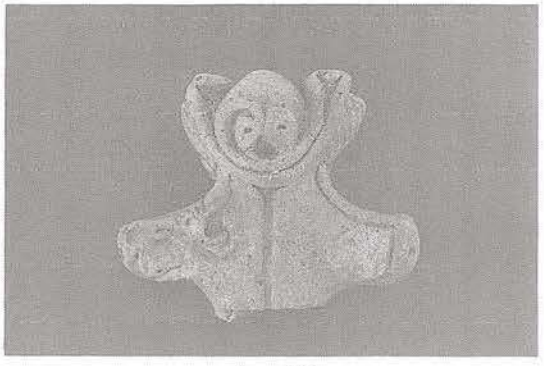
（多賀町教育委員会　音田　直記）

17．縄文時代の遺物が多量に出土

米原町多良　筑摩佃遺跡

一般国道8号（米原バイパス）建設に伴う調査として、米原町教育委員会では、平成元年度に大乾古墳群、筑摩佃遺跡、下定使遺跡の発掘調査を実施した。このうち筑摩佃遺跡からは縄文時代から奈良時代に至る遺構、遺物が多量に検出された。

縄文時代の遺構としては、大形土壙と自然流路が検出できた。土壙からは船元II式に属する土器が出土している。自然流路の堆積土は植物腐植土、いわゆるスクモ層であり、沼状の落ち込みとも考えられる。このスクモ層からは縄文時代早期から後期に至る土器が包蔵されていたが、その主体をなすものは中期のもので、船元式、新崎式、新保式に属する土器が多量に出土した。特に北陸系の土器の出土が目立つ。さらに注目できるのは同層中から出土した有脚土偶の出土である。この土偶はいわゆる河童型土偶と呼ばれ、中部山岳、



土　偶

関東、北陸地方に分布するもので、今回の資料は、近畿地方では初の出土例となろう。時期は中期前半と考えられる。

石器に関しては石鏃、石匙、スクレイパー、石斧、石錘、磨石などが出土している。なお黒曜石の剥片が数点出土している。さらに同層中からはイノシシ、シカなどの動物骨や魚骨、モモ、クルミ、トチの種子といった自然遺物も多量に出土している。

また保存状態の良好な網代が3点出土している。このうち1点には、サクラの樹皮を螺旋状に巻きつけて把手にしたものが認められる。

縄文時代以降では、弥生時代の護岸杭列、土壙群、大溝、方形周溝墓が検出され、奈良時代の包含層からは木簡が2点出土している。

（米原町教育委員会　中井　均）

18．石見型盾埴輪を回らせた前方後円墳

近江町新庄　塚の越古墳

塚の越古墳は坂田郡近江町新庄に所在する。同古墳は墳丘の一部を失っているものの、平野に位置する前方後円墳として周知されてきた。

今回の調査は、県営ほ場整備と灌漑排水整備に伴うもので、従来周知されていたよりも一回り大きい規模を持つことが判明し、全長約46m。後円部直径約27m・前方部幅約24mを測り、さらに外周には最大径13mの周濠が確認された。

古墳は東側に後円部、西側に前方部をもつ東西主軸の前方後円墳であるが、南側と北側に構造差が認められ、陽のあたる南側に、深い周濠・整った葦石・多量の埴輪堆積が確認された。

この古墳の一番の特徴は、後円部の外縁に一定間隔を保った「石見型盾埴輪」の配列が認められることで、同埴輪の出土は県内初例である。

古墳の年代は、出土した埴輪と須恵器から6世紀初頭と想定され、近江町内所在古墳の構築順序が、「塚の越古墳」→「狐塚古墳群」→「山津照神社古墳」→「人塚山古墳」と理解されるに至った。

後円部の状況

（近江町教育委員会　宮崎　幹也）

19．斜行条理開発期の建物群の発見

近江町顔戸　埋塚遺跡

埋塚遺跡は、従来から古墳と寺院跡の複合遺跡として周知されてきたが、その実態は不明で、県営ほ場整備と県営灌漑排水整備に伴う今回の調査によって始めて遺構が確認された。

検出した遺構は大別して5時期のものがある。

第1期は弥生時代中期初頭、第2期は同後期中葉、第3期は古墳時代中期を示し、方形周溝墓や大溝を築くが、続く第4期の開発によって景観を大きく変化させる。

第4期の遺構は、先行する時期の遺構を埋設、あるいは削平し、8棟以上の大形掘立柱建物を構築する。これらの建物群は、出土遺物から9世紀のものと判断されるが、その主軸が同遺跡の東側に拡がる「天の川右岸斜行条里」の基線に近似しており、この斜行条里の開発に深く結びつく遺構と推測される。

また、第5期の12世紀後半になると、同遺跡の西側に拡がる「坂田郡統一条里」の基線に主軸を合わせた掘立柱建物が構築されるため、同地域の開発過程を知る好例となった。

（近江町教育委員会　宮崎　幹也）

大形掘立柱建物（第4期）

20．今井氏居館跡の調査

近江町新庄地先　箕浦城他遺跡

県営ほ場整備事業に先立つ発掘調査で、排水路部分および切土面約1,700㎡を対象とした。排水路部分の調査では、縄文時代の多くの遺構と遺物を検出したのをはじめとして、飛鳥・奈良時代の溝・自然流路などを検出した。

縄文時代の遺構には、4基の埋甕遺構や割れた石皿

居館内の建物全景

が出土した土壙などがある。埋甕遺構のうち３基は、いずれも正位に埋設されており、そのうち２基には底部穿孔が認められた。埋甕に使用された土器は、すべて後期初頭の中津式の特徴を示している。他の土壙から出土する土器も同時期のもので、湖北地域の縄文後期の集落を考える上で重要である。

切土部分は、今井氏居館箕浦城の推定地内にあるため、当初より館関係の遺構が存在することが想定されていた。調査の結果、飛鳥時代あるいはそれに先行する時期と考えられる掘立柱建物２棟と室町時代終わり頃の堀や建物跡など多くの遺構を検出した。堀は２ヶ所で検出され、一方は幅約５ｍ、深さ0.8ｍを測る。もう一方は幅約３ｍ、深さ0.8ｍを測る。後者は人工的に埋められている。２つの堀は共に調査区内で片端が止まっており、それらに挟まれた未調査部分が門にあたると考えられる。

居館内部では、建物２棟以上が存在するほか、炭化米出土土壙、炭化建築材出土土壙、土師皿集積遺構、中世墓などがある。多くの柱穴の中には、埋土に多くの焼土を含むものがあり、一時期居館が火事に遇ったことが考えられる。しかし、地面は焼けた痕跡はなく、焼けた後に整地していることが伺える。

今回の調査で検出した館関係の遺構は、中世館の内部構成を考えるうえでも重要な資料であるといえる。

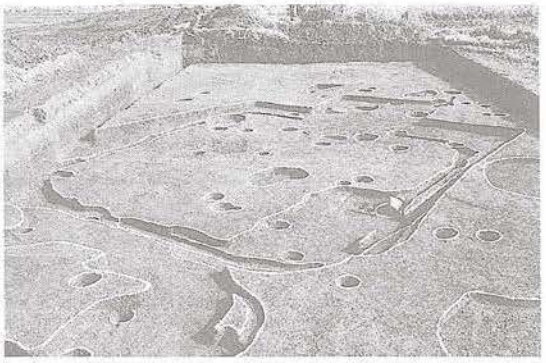
（(財)滋賀県文化財保護協会　中村　健二）

21．古墳時代の集落跡

長浜市新栄・西上坂　大塚遺跡

大塚遺跡は、越前塚遺跡の北東に位置する。今回の調査は、市道垣籠加納線改良工事に伴う事前調査で、遺跡の南限に近いところを幅９ｍ、東西 280ｍ（調査面積2,520㎡）にわたって全面調査を実施した。

調査の結果、古墳時代の竪穴式住居跡11棟、土壙墓２基、自然水路１条、その他多数のピット・土壙・溝等を検出した。竪穴式住居跡は、小さいもので 2.8ｍ×２ｍ、最大のものでは7.5ｍ×７ｍを測り、大小様々



９号住居址完掘状況（西から）

である。遺構の時期は、出土した遺物から５世紀後半から６世紀前半が主体と考えられる。

出土遺物は、土師器が主体で、須恵器は少ない。石製品も砥石が数点出土したのみである。他には、自然水路内から弥生時代末期の土器が数点出土したのと、２号土壙墓から人の骨片（大腿骨か？）が出土した。昭和59年度の第１次調査では、鉄製品や管玉の出土をみたが、今回は出土しなかった。

大塚遺跡は、平成２年度・３年度と発掘調査を予定している。遺跡の中心部が対象となるので、今年度以上の成果が期待される。

（長浜市教育委員会　丸山　雄二）

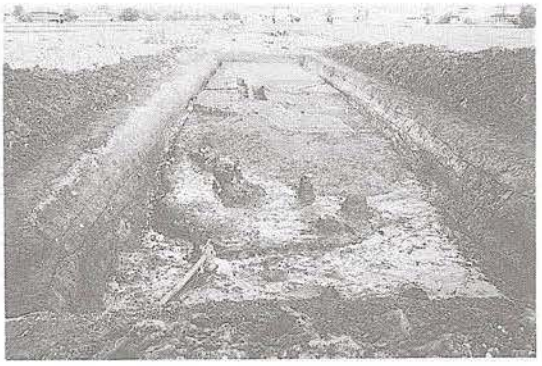
22．縄文晩期から古墳前期に至る遺物出土

長浜市口分田　川崎遺跡

今回の調査は、団体営圃場整備事業（口分田地区）に伴う事前調査である。調査対象面積は、6.3ha で、その内調査したのは約 3,000㎡である。

調査は、支線排水路及び支線道路・切土の予定地に幅２ｍから５ｍのトレンチを設定し重機による掘削を遺構面まで行ない、それ以後人力によって遺構精査・遺物採取・記録図面の作成および写真撮影などの作業を行なった。

調査の結果、自然水路と溝状遺構・ピット少数を検



Ｔ－16完掘状況（西から）

出した。自然水路は南北及北西方向に延びるもので遺物は流れ込みのものである。溝状遺構は自然水路に流れ込んでいると考えられる。遺物は、縄文晩期の少片が溝内下層から数点出土し、弥生中期第３・４様式が別溝内から出土している。遺物で大半をしめるのが古墳前期の土器で完型の土器も含んでいる。水路及び溝のつながりは不明確であるが、来年度調査予定の南部地区の成果に期待したい。

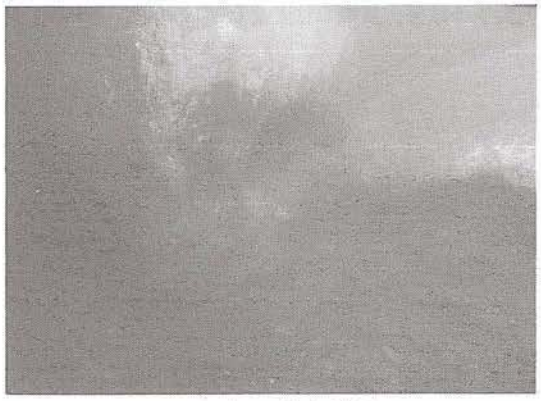
（長浜市教育委員会　森口　訓男）

174．水底発掘調査の紹介

唐橋遺跡

唐橋遺跡は、現在の瀬田唐橋の下流約80ｍの瀬田川底に立地する。1987年に実施した潜水による遺跡範囲確認調査の結果、集石遺構および、遺物包含層が検出されたことから、1988年度より本格的な調査を開始し、1989年度に調査を終了した。前年度の調査の結果、７世紀代の橋脚基礎遺構が２基、これより時代の下る橋脚基礎遺構が２種類２基、さらに橋に関わると考えられる礎石群、Pit 等が検出されている。

今年度は、前年度調査の上流部 850㎡について、潜水による発掘調査を実施した。調査の結果、橋に関わると考えられる礎石群と大量の遺物が検出された。礎石には二つの種類が認められる。一つは直径約20cm程の円孔を中央に持つもの、一つは一辺１ｍ前後、厚さが20cmほどの方形の石材を用いたものである。礎石は、いずれも散在しており、現位置を留めていない可能性が高い。この礎石の年代は、現段階では不明であるが、宋銭を中心とする貨幣が、この周辺より大量に出土していることから、中世もしくは近世初頭のものである可能性が高い。前年度にこの上流部より検出された、年代不明とした２基の橋脚基礎遺構が、奈良時代もしくは平安時代のものの可能性が高いことから、唐橋（セタハシ）は、徐々に上流部に移設され、現在位置に至ったことが推定できる。出土遺物は多岐に渡り、縄文時代早期から近代に至るものが含まれる。中でも、戦闘に用いられたと考えられる武具類や、セタハシの建築に用いられたと考えられる斧、釘、鎹（かすがい）等の建設用具、なんらかの祭祀に用いられたと考えられる仏具、貨幣等が注目される。



唐橋遺跡　検出礎石

針江浜遺跡

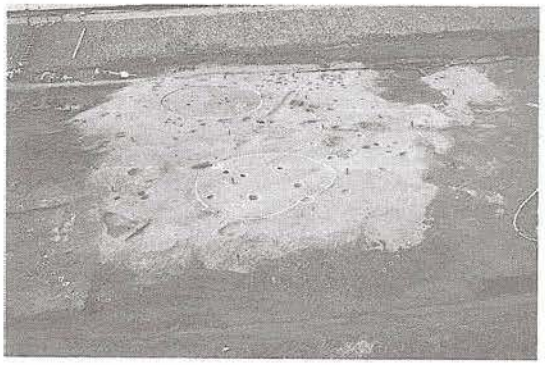
針江浜遺跡は、高島郡新旭町針江地先の湖底に立地する。1986年に実施した潜水試掘調査の結果、弥生時代前期の遺物包含層が検出されたことから、1987年より本格的な調査を開始し、1989年の第３次調査をもって終了した。

調査の結果、３面の遺構面が検出されている。第１遺構面は年代は不明であるが、杉の巨大な板材により護岸された畦道上の遺構と水田面などからなる。第２遺構面は、幅５ｍ以上を測る大溝３条と、これに合流、分流する小溝多数からなる灌漑遺構、掘立柱建物などからなる。検出された大溝の一部には、板材を用いた堰状の遺構が認められる。

今回の調査で最も注目されるのは、第３遺構面から検出された弥生時代前期の遺構群である。遺構は、内湖状の落ち込みと、琵琶湖の間に張り出た柵と溝により外界と区画された、砂洲状の高まりの上に立地している。検出された主な遺構は、竪穴式住居２棟、掘立柱建物２棟、土壙、土壙墓などである。さらにこれらの遺構にともない土器を中心とする大量の遺物も検出されている。中でも特徴的なのは、多様な生活用具の未製品が見られることである。いろいろな製作段階の鍬、石棒、石斧、土器の製作に用いられたと考えられる粘土の塊などがそれである。

この第３遺構面の調査結果は、琵琶湖湖岸における典型的な遺跡の立地を示していると共に、湖岸に生きた人々の生活の有様を、具体的に復元することを可能にしたといえよう。

（大沼　芳幸）



針江浜遺跡　第３遺構面全景